

大野結夢さん第44回全国中学生人権作文コンテスト内閣総理大臣賞受賞

第44回全国中学生人権作文コンテストで内閣総理大臣賞を受賞した泉崎中学校3年（現在高校1年）の大野結夢さんが、2月17日（火）に泉崎村長、3月19日（木）に福島県知事及び福島県教育委員会教育長を表敬訪問し、受賞の報告を行いました。

村長表敬訪問の際に、大野さんは「素晴らしい賞をいただきありがとうございます。人同士助け合えることが当たり前のやさしい世の中になってほしいです」と述べ、受賞の感想と、作品に込めた思いを語りました。

村長、県知事、教育長からはその功績をたたえらるとともに、今後の活躍への期待が寄せられました。

「全国中学生人権作文コンテスト」は法務省と全国人権擁護委員連合会の主催で、次代を担う中学生の皆さんに、日常の家庭生活や学校生活等の中で得た体験に基づく作文を書くことを通して、人権尊重の大切さや基本的人権についての理解を深め、豊かな人権感覚



福島県教育委員会
教育長表敬訪問



福島県知事表敬訪問



泉崎村長表敬訪問

を身に付けてもらうことを目的として、昭和56年度から実施しており、令和7年度は6,377校から72万1,058名の応募がありました。

受賞した作文は次のページに掲載していますので、ぜひお読みください。

もっと知りたい! いずみざき文化財



けんしていしせき していび しょうわ ねん がつ にち
～県指定史跡（指定日：昭和48年3月31日）

かんのんやままがいくようとうばぐん
観音山磨崖供養塔婆群～

ふませかんのんやままがいくようとうばぐん いま やく ねんまえ かまくらじだい ぶつきょうちようこく しぜん がけめん
踏瀬観音山磨崖供養塔婆群は、今から約700年前の鎌倉時代につくられた仏教彫刻です。自然の崖面に
ぶつきょう きょうてん ぼんじ ご か とう あみだによらいぞう ちようこく
仏教の経典にある梵字（サンスクリット語）が書かれた塔や阿彌陀如来像などの彫刻がつけられています。
ぶつきょう ぎやくしゆ おし ぎやくしゆ い あいだ ぶつきょう しゆぎょう くだく つ し
仏教には「逆修」という教えがあります。逆修とは、生きている間に仏教の修行をして功德を積み、死んでから極楽浄土に行くことができるという教えです。

いせき かまくらじだい せんらん よ ひびく かえ
この遺跡がつくられた鎌倉時代は、戦乱の世でした。日々繰り返される
せんそう いっぱんしよみん きやうせいき さんか とうぜん せしやう ひと あや
戦争には一般庶民も強制的に参加させられ、当然したくない殺生（人を殺めること）もせざるをえませんでした。

ぶつきょう せしやう きん あくぎょう かさ じごく お
仏教では殺生は禁じられており、悪行を重ねると地獄に落とされてしま
います。そこで、少しでも功德を重ね、悪行の罪を軽くしようと残された
すこ くだく かさ じつ あくぎょう つみ かる のこ
のがこの供養塔であると言われていたのです。

げんざい ふませかんのんやままがいくようとうばぐん うえ こうそくどうろ けんせつ みぎ
現在の踏瀬観音山磨崖供養塔婆群の上には高速道路が建設されています。右の
しゃしん こうそくどうろ けんせつ まえ かのんやま しゃしん したかわ まがいぶつ うえ
写真は高速道路が建設される前の観音山です。写真の下側には磨崖仏、その上に
あな あ じつ こふんじだい よこあなぼ
いくつか穴が開いています。この穴は、実は古墳時代につくられた横穴墓なのです。

ぶつきょう くだく つ いちばん ほうほう なに くよう きやう とな
仏教において功德を積む一番の方法は、何かを供養するためにお経を唱えたり、
ぶつきょう かみさま まつ げんたい はかまい な
仏教の神様を祀ったりすることです。しかし、現代の墓参りのように亡くなった
かぞく くよう あ まえ くだく だれ わ
家族の供養をするのは当たり前のことで功德にはなりません。そこで、誰だか分
ひと はか よこあなぼ ほうむ ひと くよう まがいぶつ
からない人のお墓（横穴墓）に葬られた人を供養するために、この磨崖仏がつく
られたと考えられています。



こうそくどうろ まえ ふませかんのんやま
高速道路ができる前の踏瀬観音山



うきぼりあみださんぞんらいごうぞう
浮彫阿彌陀三尊来迎像

理解からはじまること

泉崎中学校

3年 大野 結 夢

私の母は耳が聞こえない。私が生まれた時には、すでに聴力を失っていたので、母の耳が聞こえないことは、私にとって特別なことではなかった。

母は、徐々に聴力がなくなっていく原因不明の難聴で、二十代の前半には完全に聴力を失っていた。大人になってからの失聴で、周りには手話を使える人もなく、口の動きを見て言葉を読み取る「口話」という方法を身につけたそうだ。

母は、いつも明るく元気で、耳が聞こえないことを気にしているそぶりは全く見せない。学校から帰って、その日一日の出来事を母に話すのが日課であり、私の楽しみだ。聞こえなくても、私の口の動きを見て、熱心に話を聞いてくれる。どんな悩みや辛いことがあっても、母に話すと、すつと心が軽くなるのだ。私にとって、母は一番の心の支えだ。

私が小学六年生のとき、五年生の担任の先生から福祉の学習で、私の母に講話をお願いしたいと話をいただいた。しかし、母はすぐに承諾をしなかった。「お母さんが耳が聞こえないことをみんなに知られることで、結夢が学校で嫌な思いをしないかな」と不安に思ったそうだ。私は「大好きな母がみんなの前でお話するなんてうれしー！」という気持ちだったのだ。

「五年生の子たちはすごく優しく、いい子ばかりだから大丈夫だよ！」

と迷う母の背中を押した。

依頼を承諾した母は、今までの経験などを文章

にまとめていた。できあがった原稿を見て、私は大きな衝撃を受けた。母が「いつも明るく元気な母」になるまで、どれだけ悩み、葛藤してきたか書いてあったからだ。難聴の原因が分からなかったので、たくさん病院をまわり、どうにか治療法を見つけようとしたこと、どこかの病院へ行っても治療法はないと言われ絶望したこと、耳が聞こえないことを告げると、途端に馬鹿にしたような態度を取る人もいたこと、そんな中でも母の障害を理解し、助けてくれる人もたくさんいたことなど。「明るく元気な母」になるまで、多くの紆余曲折や葛藤がつづられていた。そして、講話の最後にはこんなことが書いてあった。

「担任の先生から、みなさんの前でお話してほしいというおたよりをいただきました。そのおたよりには『誰にでも手を差し伸べられる優しく、強い心を持つ子に育ってほしい』という先生の願いが書いてありました。でも、実際に手を差し伸べるのは、とても勇気がいることだと思えます。実は、障害者の私自身も、周りに助けてほしいと言葉に出すのは勇気がいります。相手の迷惑にならないか、負担にならないか考えてしまうからです。だけど、障害があるからって特別なことではないと思うんです。まずは、自分の一番身近な人に声をかけてみるのはいかがでしょうか。家族や友達が困っていることはないか、手助けできることはないか、そんなことを毎日の生活の中で自然に考えられるようになればいいと思います。そうすればハンディキャップを持った人に対しても、相手の立場や気持ちになって寄り添って『何かお手伝いできることはありませんか。』と声をかけられるようになるかもしれません。」

私にとって、聴覚障害者の母がいることは当たり前の日常だ。しかし、障害について何も知識がない人に「私は耳が聞こえないのですが」と言っても、直ぐに対応するのは難しいだろう。母が周りに「助けてほしい」と言い出せないのは、相手の戸惑いや蔑みを感じることもあるのも理由ではないか。

コロナ禍で、マスク生活が長く続いていたため、口話を使う母にはかなり不慣れた生活だった。だが、最近、母の耳が聞こえないことを伝えると、マスクを取って口の動きを見せてくれる人、また、すぐに紙とペンを用意して、筆談してくれる人、とても増えたのだ。母に「どうしてだろう。」と聞いてみると「もしかしたら、ドラマの影響かもしれないね。」と言っていた。そういえば少し前、聴覚障害をテーマにしたドラマがヒットしていた。耳が聞こえない人に対して、どう対応すればよいか理解され、実際に行動に移せる人が多くいるのだ。そう考えると、ハンディキャップを持つ人への知識や理解がしつかりあれば、世の中はもっと過ごしやすくなるかもしれない。学校の授業で、福祉体験などあるが、たくさんある中のほんの一部の障害に触れているだけで、本当に理解するには、まだまだそこに割く時間が足りないと思う。

私が、母の障害を特別なことではないと思うように、さまざまな障害の理解が進むことで、障害者という概念を持たずに、その人自身を見られる世の中になってほしい。

「健常者が障害者を助ける」という構図ではなく「人が人を助ける」という考えが大切なのではないだろうか。